

**[文献紹介]** ANDY HARGREAVES AND MICHAEL FULLAN  
"WHAT'S WORTH FIGHTING FOR IN EDUCATION ?"

著者	島田 希
雑誌名	教育科学セミナー
巻	34
ページ	143-145
発行年	2003-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00019397">http://hdl.handle.net/10112/00019397</a>

ANDY HARGREAVES AND MICHAEL FULLAN

*WHAT'S WORTH FIGHTING FOR  
IN EDUCATION ?*

(Open University Press, 1998)

本書の著者であるアンディ・ハーグリーブスは、カナダのトロント大学オンタリオ教育研究所(OISE)において、教育における理論と政策を研究しており、現在その分野における教授である。また、彼は国際教育変革センター(International Center for Educational Change)の所長でもあり、教育改革研究の国際的なエキスパートとして名高い。そのような彼の専門領域は、広範囲にわたっているものではあるが、特には、教職や教師文化に注目し、教師がいかに専門家としての発達を成し遂げていくのかという、専門家としての発達であるといえる。そして、その観点から拡張していく学校改革というものを見据えているのである。また、共著者であるマイケル・フランは、トロント大学教育学部の学部長であり、ハーグリーブスと同様に教育改革研究のエキスパートである。

はじめに、本書の構成を紹介したい。本書は4章構成で、第1章では、“What's out there?”と題して、学校という枠組みを越え、外の世界へと広がっていくときに生じる問題を述べている。そして、第2章では、“Going deeper”と題し、教師の協働的な職場をいかに創り出していくのか、その目的とそこに秘められている希望を述べている。また、第3章では、“Going wider”と題して、外の世界との関係を立て直す指針を、五つの外的な力として、コミュニティーや政府、テクノロジーやビジネス、また教職を引き合いに出しながら述べ、第4章では、“Going out there”と題し、外の世界へ拡張していくための教師や校長、行政等の指針を述べて

いる。

本書の中で、ハーグリーブスは既存の学校組織をいかに拡張させていくべきか、また、なぜ、今、学校を拡張させなければならないのかを示している。彼によると、現時点での学校組織は、社会の変化に対応できず、社会の求めるニーズと既存の制度の狭間で身動きとれずにいるのである。この点について、彼は「既存の構造は疲弊している」(p.25)と端的に述べている。また、このような既存の構造の中で、彼が目したのは、教師である。既存の構造と社会や保護者の要望との間で、教師にかかる負担が明らかに増大しているのである。

彼はこのような状況を打破するためにも、生徒や保護者、教師間、また社会との連携を強調する。しかし、彼の「連携」を述べる際、欠かすことのできないことは、感情(emotion)である。ハーグリーブスは、感情面を常に重要視しており、特に連携においては、感情的なつながりの無い連携は、彼の示す「連携」ではない。この点について、彼は「情緒的なつながりは全ての訓練と学びの基礎となる」(p.37)と考えているのである。

彼は、また、このような情緒的な関係を築きながら、学校という枠組みを越えて外との連携を結ぶ際には、必ず内部の事情を公にするようになりリスクといったものが伴うものだと述べている。なぜならば、彼は「目的と情熱、また、協働と提携の力を持って外の危険な世界へと向かうことは、外の世界と格闘する価値のある本質的なことである」(p.73)と考えているからで

ある。つまり、彼によると、既存の組織に何らかの揺らぎを与え、リスクに立ち向かわなければ、新たなものは創造できないのである。

こうして、彼は内にリスクのはらんだものともいえるこのビジョンを見据えた上で、第4章において、拡張していくための具体的な指針を提起している。この本書の一連の流れから、教育の変化には、何らかの戦略ないしビジョンが必要であることが伺える。なぜならば、急激な変革を行なうと、教育は混乱に陥り、教育としての機能が麻痺してしまうからである。そして、そのビジョンと現状を比較し、何を補い、またそれをどのように補っていくのかを考えなければならぬのである。

(浅田貴子)

従来、教育改革が語られるときには、もっぱら政策やカリキュラムに焦点が合わせられ、その改革の直接的な実行者である教師に対して、大きな注意が向けられることはあまりなかった。しかし、ハーグリーブスは、現在教師が置かれている状況を「あまりにも多くの教育改革や教育の再構築は、教師の自信を破壊し、活力を流出させ、時間を使い果たし、希望を取り除いてしまう」(p.4)と分析し、警告を発している。

教育改革を成功させるためには、綿密に作り上げられた政策や制度の見直しが必要不可欠である。しかし、それだけでは不十分であり、それを実行する教師が教育に対する希望を失うことなく、改革を推進していくことができるような環境、関係性を築いていくことが必要不可欠である、と本書では繰り返し述べられている。

日本の教育現場に目を向けてみても、次々と押し寄せる教育改革の波によって、教師が疲弊している様子が伺えよう。ひとたび教育改革が滞ると、教師に対しては、両親、マスコミはじめ様々なところから非難が浴びせかけられるこ

ととなる。そして、そのような非難によって、教師はますます疲弊していくという悪循環が、まさに現在進行しているといえる。

しかし、ハーグリーブスが、フランと共著の *What's worth fighting for in your school* (1996, Teachers College Press) という、*What's worth fighting for* シリーズの中の一冊で明らかにしているように、教師の個人主義に代表されるような、改革の妨げとなる要因が学校には多く存在している。こうした足元の問題点が解決されることがなければ、外からどんなに素晴らしい改革案が持ち込まれようとも、学校および教育が好転する機会を上手く活用することすら困難となる。このような視点に立った上で、本書においては、個人主義的な教師文化から協働的な文化へと転換していく必要性が強く主張されている。

さらに、価値の多元化が進む現代社会において、これまでの学校の存在意義が薄れつつあるという状況が言及されている。ここ数十年間に、市場原理のもとでの学校選択制の広がりやテクノロジーの発展によって、様々な学校の在り方が可能となり、その結果、「教育の公共性」が著しく希薄化した。それに加えて、不安定な経済状況等を背景とした自信喪失感や閉塞感が社会全体に広がる中で、人々が未来に対する展望を見出せずにいるばかりでなく、未来の市民を育成する学校に対する信頼感がますます薄れつつあるといえよう。

このような状況において、学校文化や学校内外の関係性を再構築するだけでなく、今一度、新たな学校の存在価値を構築し、それを広く社会に示していくことが、現在求められている、とハーグリーブスは述べている。そして、そのために必要な新たな視点は、「教育を社会の多くの部分で共有された責任とみるべきである」(p.11) という言葉に端的に表れているといえよう。つまり、学校が中心となって、しかし単

独ではなく、外の世界と協働的に教育の価値を再構築していくことが必要なのである。

さらに、ハーグリーブスは、「What's worth fighting for in education?とは、最終的には必死に進進しようとする全ての教師、生徒、コミュニティとともに、希望のライフラインを發展させることである」(p.138)と述べ、本書の最後において、未来の教育に対する「希望」を、学校を含め社会全体で追求していく必要性を示している。

ここで、ハーグリーブスの教育改革の具体的な提案を事細かに挙げることはできないが、学校内外の新たな関係性や価値の再構築に限らず、子どもの新たな学習活動等に関しても幅広く言及している。それらの中には、即時の達成が困難なものも複数含まれている。そして、現在の切迫した状況を思い浮かべると、より強力な即効性を持った提案が求められているのかも

しれないとも思われる。けれども、既存の教育の構造が綻びつつある今だからこそ、しっかりとした教育のための新たな基盤を築いていくことが必要なのではないだろうか。

本書が多くの人々に読まれ、教育改革に関して、さらなる議論が生成されることを期待したい。なぜなら、本書は、学校と教育の未来、その希望を問う人々にとって、グローバルな共同作業を開始するための確かな共感をもたらすに違いないと思うからである。

また、Hargreaves, A. (1994). *Changinig teachers, changing times*. Teachers College Press や Hargreaves, A., & al. (2001). *Learning to change*. Jossey-Bass の中でも新たな教育の在り方について数々の重要な視点を示している。これらもあわせて紹介したい。

(島田 希)